

TOPICS 今号のトピックス

- 公開セミナー 第36回名作の舞台裏『御宿かわせみ』
- 「フランダースの犬」と世界名作劇場展
- 夏休み 各種体験教室を開催

■公開セミナー 第36回名作の舞台裏『御宿かわせみ』

9月1日、番組制作スタッフや出演者が自らの番組を振り返る人気公開セミナー「名作の舞台裏」を開催。今回は、平岩弓枝のロングベストセラーをドラマ化し、女性に絶大な人気を博した時代劇『御宿かわせみ』を取り上げた。小説『御宿かわせみ』は、幾度かドラマ化されているが、今回取り上げたのは、NHKで1980～83年にかけて放送された、第1・2シリーズ。今も根強い人気を持つこのシリーズは、『新・御宿かわせみ』のタイトルで30年振りに甦り、CS時代劇専門チャンネルで9月に放送される事となった。それを機会に、33年前の名作時代劇を振り返った。会場は、イイノホール(東京都・千代田区)、事前に1700名を超える応募があった。

[登壇者] 真野響子(出演) 小野寺昭(出演)
村上 慧(制作) 黛りんたろう(演出)
[司 会] 渡辺紘史(放送人の会)



司会の渡辺氏も第1シリーズの演出を手掛けた『御宿かわせみ』ファミリー。ステージは久しぶりに家族が集まったような和やかな雰囲気の中、進行された。

るいと東吾を演じた、真野さんも小野寺さんも、共に『御宿かわせみ』はライフワークという。真野さんは「当時、時代劇を本当に何もわかっていなかった。何もわかっていない所から始まったライフワークという感じです」、小野寺氏は「今まで色々な役を演じ、多くの良い作品に出させて貰いましたが、この作品は3本の指に入る代表作。未だに“かわせみ”は僕の中で生き続けている。僕は、多くの

方に“殿下、殿下”と言われますが、『小野寺さんと言えば、かわせみですよ』という方もいらして、それを聞いた時は凄く嬉しい。」と語った。

『御宿かわせみ』の主演に抜擢された当時、真野さんも小野寺さんも若く、時代劇経験もあまりなかった。村上氏は「“かわせみ”を始める時に、真野さんでいきいと言ったら、宇野重吉先生に『大丈夫か?』と言われたのを今でも覚えています。真野さんが、初めて衣装の着物を着た時、何だか“ぬーっと”していて大丈夫かなと思った。」と笑わせ、「回を重ねる毎に、どんどん良くなってきて、最後は、素晴らしい主役になったと思います。」と振り返った。

『新・御宿かわせみ』を演出することになった黛氏は、「本格的な助監督でついたのは、『御宿かわせみ』が最初。初めての時代劇なので、時代劇の約束事などを全く知らず、現場でもかなり怒られ、恥をかきました。第2シリーズの“冬の桜”が演出デビュー作。今でも“冬の桜”は僕の中で、特別な作品です。」と語った。

村上氏は、キャスティングの狙いについて「真野さんに最初にお目にかかった時、この人が主役なら大丈夫だと思った。」という。原作者の平岩弓枝氏は、当初、真野さんのキャスティングに反対だった。村上氏は「『なんで山本陽子さんじゃないの?』と言われたのを覚えています。」と当時のエピソードを披露。その平岩氏も今は、るいを、真野さんをイメージしながら書いているという。真野さんが「先日、平岩先生と対談をさせて頂いた時に、そう言って頂きました。るいさんは、本当は、原作では小さい人なのです。私



はご覧のように大女ですから、本当にいつも申し訳なくて。大女というのは、あらが見えやすいから、立ち振る舞いも大変なのです。それに、髪をつけて



下駄を履くと、東吾さんより大きくなってしまいます。」と笑いを誘うと、小野寺さんが「僕のほうが小さく見るとまずいので、僕は草履を何重にもして、ものすごく高い草履を履いていました。」と撮影裏話をつけ加えた。

時代劇には、決められた様式や作法が多数ある。『御宿かわせみ』は、それらを知らない若いスタッフや役者を抜擢して作り上げた。渡辺氏が「演出の岡本憲侑さんと村上さんが『若い人がどんどんやれ』と、20代の者も含めた若



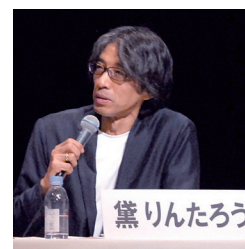
手で番組を作らせてくれた。毎日合宿していたような感じ。」と振り返ると、村上氏は「若い人をたくさん抜擢してやって貰ったのだけど、皆、ものを知らないから乱暴なのです。着物を逆向きに着いても平気みたいな所がある。そういう意味では、本当に目を光らせていて、間違いがあつてはいけないと思って一生懸命やっていたのを覚えています。」と、当時の様子を語った。渡辺氏が「そういう未熟な人間を支えてくれるスタッフがいた。時代劇の伝統、その道のしきたり・作法・様式や、習慣に根ざした表情一つ作るにも的確なアドバイスができる人達がたくさんいた。」と話し、衣装の担当をしていた熊谷晃氏をステージに呼び紹介。熊谷氏は、長年、大河ドラマを担当している衣装部屋の生き字引のような人。あらゆるドラマの関係者が皆、衣装について、熊谷氏の意見を聞きにくるという。

ると東吾の馴れ初めを描いたシーンやいくつかのエピソードを映像で振り返ると、黛氏が「思わず見入っちゃいますね。全然古さを感じない。最近作られている作品よりも遥かに切実な思いが伝わってくる。この時代のレベルの高さを改めて思い知りました。」と述べると、渡辺氏も「平岩さんや脚本の大西信行さんも、ると東吾の気持ちを、セリフでちゃんと言い切っている。最近ではセリフを端折ったりするケースがある。ここまできちんと書かれていると良いですね。」と加えた。更に、村上氏が「非常に残念だが、最近の時代劇は、私から見ると、言葉遣いを含めて、少し乱暴な感じがする。“かわせみ”などは、非常に丁寧に作られていて、この時代の雰囲気やうまく伝えていていると思う。こういう作品がいっぱい出てくると良いなと最近思うようになりました。」と述べた。

撮影当時を振り返り、村上氏が「この2人で本当に時代劇がやれるのかなと思い、最初は心配でした(笑)。でも、立ち振る舞いというか、そういう所で2人とも、なんともいえない品のいい雰囲気がある。そこが、私が、これはいけると思った最大の理由です。平岩先生にも『だから大丈夫です。』と言ったのを覚えている。」と当時を懐かしむ。小野寺さんは「パート1のときは立ち回りが上手くなく、

花沢徳衛さんに『主役の立ち回りではない』と言われた。パート1が終わってから、色々和研究したり見たりしてパート2は少しクリアできました。」、真野さんは「とにかくお茶をやるようにと言われました。お茶もお裁縫も、この間、『新・御宿かわせみ』の撮影の際、結城美栄子さんが“あなた上手くなったわね。”と言うのです。30年経って下手になっていたら困りますよね。所作の先生も、ほとんど何もおっしゃらなくて、そういうものが身に付いていて、今は何とこの私が婦人雑誌で着物のページを持っています。これも“かわせみ”のおかげです。」と語った。

『新・御宿かわせみ』について、黛氏が紹介。「舞台は明治6年。東吾は戊辰戦争で行方不明。新しい世代の人達が新しい価値観、世界観の明治の中で新たな事件に遭遇して、それを解決していく。その中に江戸の情緒をずっと受け継いでいる“かわせみ”が揺るぎなくあり、そこでのいが宿屋を営みながら東吾を待ち続けている。そのような設定で85分の単発の作品を作りました。」



真野さんの艶やかな着物は、『御宿かわせみ』の初日のリハーサルに着たもの。「先日、結城さんに『あなたはあの時、遅刻した上に、まっ黄色の着物を着てきたのよ』と言われて、びっくりしました。たぶん着物を着るのも慣れていなくて大変だったのだと思います。今日は帯もそのまま30何年前のものを付けてきました。」と披露。真野さんの33年振りの着物に会場から拍手が起った。

今後の時代劇について、小野寺さんは「私は個人的に時代劇がとても好きなのですが、なかなか良い作品に巡り会えない。“かわせみ”は、何回も何回も再放送された。そういう番組は、そう多くはないと思います。時代劇というと殺陣や様々なサスペンスがありますが、“かわせみ”のように、捕物帳であり、ホームドラマであり、そして人が人を思う日本の良き時代の時代劇というのを、これからどんどん作って頂き、そういう作品に、自分も参加出来れば良いなと思っています。」、真野さんは『『新・御宿かわせみ』で若者の演技を見たら、皆、凄く上手いのです。でも、まだ、これが時代劇かというような言い回しもあり、不足の部分もたくさんあります。私達も一緒にやりながら育てていきたいと思っています。皆さんも見守ってください。ご声援、応援を、宜しくお願いします。」と締めくくった。



■「フランダースの犬」と世界名作劇場展

『フランダースの犬』をはじめとするアニメシリーズ「世界名作劇場」の魅力を紹介する企画展示を、7月12日(金)～9月8日(日)の期間開催した。



「世界名作劇場」は、1975年の『フランダースの犬』でスタート(制作:日本アニメーション/放送:フジテレビ系列)。『母をたずねて三千里』(1976)、『あらいぐまラスカル』(1977)などで人気を博し、2009年の『こんにちははアン』まで、26作にも及ぶ長期シリーズとなった(2007年以降はBSフジで放送)。日曜日の夜にお茶の間に放送された作品は、世界各国を舞台に、厳選された児童文学に



よる物語と、美しいアニメーションで多くの視聴者に感動を与え親しまれてきた。また、家族愛、友情、人間愛といった普遍的なテーマは、時代や世代

を超えて今なお多くのファンに愛され続けている。

第1作目となった『フランダースの犬』は、19世紀末のベルギー・フランダース地方を舞台に、牛乳運びで生計を立てる少年ネロと愛犬パトラッシュ、祖父のジェハン、幼なじみの少女アロアらの物語。心優しく絵の才能に恵まれたネロの感動的なストーリーと、やがてジェハンに先立たれ、絵のコンクールにも落選し、アントワープの教会で憧れ続けたルーベンスの絵を見ながら天に召されていくという悲劇的な結末は、名高い名作アニメとして知られている。

展示会では、『フランダースの犬』を中心に、シリーズ全26作品の内容や舞台となった場所をパネルで



掲示。名場面を再現したジオラマでは、『フランダースの犬』からは、ネロとパトラッシュが牛乳を運ぶ荷車、村の中心となる風車小屋、ルーベンスの絵が飾られた教会の祭壇などが立体的に再現された。また、『母をたずねて三千里』からは、主人公の少年マルコと港の風景が、『赤毛のアン』からは舞台となるプリンス・エドワード島の橋の風景が再現された。

この他にも、アニメ放送で実際に使用された全26作品のアフレコ台本、今では貴重となったセル画、アートギャラリー、クイズなどで「世界名作劇場」の世界を紹介した。

上映会では、全26作品の中から『フランダースの犬』『あらいぐまラスカル』『トム・ソーヤーの冒険』『ふしぎな島のフローネ』など人気の15作品を日替わりで上映した。

また、『フランダースの犬』と並んで人気の高い『あらいぐまラスカル』からは、ラスカルとの握手会・記念撮影会も期間中3日間、計12回行われ、幅広い年代のファンがラスカルとの交流を楽しんだ。



会場には、連日、親子連れを中心に多くの方が訪れ、26作品の舞台が示された世界地図や、キャラクターの描かれた絵コンテなどを熱心に見入っていた。また、館内5箇所に設置された、スタンプを探すスタンプラリーに挑戦したり、リアルなジオラマをバックに、記念撮影をする姿が見られた。

来館者からは、「親子3代で、夏休みを利用して来た。子供時代の心の教育となった番組だった」「親にとっては懐かしく、子供にとっては新しく、一緒に楽しめた」「わが子に見せたいと思っていた世界名作劇場をここで見ることができると知って来場した。本では



読み聞かせていたが、現代にはない名作が子供にとっても魅力的だったようだ」等、世代を超えて親子共に楽しめたという声が多く聞かれた。また、番組の主題歌を口ずさむ人や、特定の作品についての思い入れを熱心に語り合う姿など、今もこのシリーズが人々の心に強く刻まれていることが伺えた。

期間中の来館者数は1日平均283人。今後も夏休みには親子に人気の高いアニメの企画展を開催し、この時期に放送ライブラリーに行く楽しい企画をやっていると思ってもらえるよう定着させていきたいと考えている。

■夏休み 各種体験教室を開催

放送各社の協力および諸団体の助成を受け、小中学生向けの各種体験教室を以下のとおり実施した。

■日テレ体験教室

7月28日（日）、小4～6年生とその保護者を対象に、日本テレビ技術統括局のスタッフが放送技術の面から番組作りについて話した。カメラ



は、構えるアングルによって被写体の印象が変わることをボクシングの入場シーンを例に説明したり、『24時間テレビ』のテーマ曲“サライ”を、打楽器、コーラスなどパートごとにボリュームを上げていき、1つの楽曲にまとめあげる音声のテクニクも実演された。編集で不要な部分をカットしたり順番を入れ替えることで、より分かりやすく効果的な映像を作ることができるが、「嘘の編集は絶対にやってはいけない」という説明に参加者は真剣に聞き入っていた。後半は、中継車や編集機などの放送機器に触れたり、カメラを担いだりする体験を行った。（午前・午後の計2回開催／参加者120人）

※放送文化基金助成事業

■親子出前授業@テレ朝

7月31日（水）、小5～中3年生とその保護者を対象に、テレビ朝日の災害報道担当者と気象予報士が、テレビの「天気予報」について話した。



現在『スーパーJチャンネル』を担当している気象予報士の荒木真理子さんが、「気象予報士の一日」について説明し、膨大なデータを分析し、その日の予報を作り上げるまでを解説した。また、雲の動きや生物の行動から天気を予想する「観天望気」について、「世の中のことで、唯一未来を予想できるのが天気予報」と話し、雲の変化でこの先の天気を予測する方法を教えた。

お話の後には、お天気キャスター、カメラ、タイムキーパー、フロアディレクター、スイッチャー、音声の6役で、実際に子供達に書いてもらった原稿を基に天気予報番組を体験した。（参加者106人）

※放送文化基金助成事業

■アナウンサー体験教室

8月7日（水）と9日（金）、小4～6年生が、フジテレビとNHK日本語センターのアナウンサーから指導を受けた。

まず、ニュース、レポート、司会等様々な「アナウンサーの仕事」について話を聞き、発声練習や滑舌練習をした。キャスター、スポーツリポーター、お天気リポーターに分かれて本番用の



ニュース原稿読みの練習を行った後は、放送ライブラリー内のスタジオでニュース番組体験をした。その後、体験の様子を録画したVTRを見ながら、講師からそれぞれ講評をもらった。参加者からは、「緊張して間違えてしまったが、先生から良かった部分をほめられて嬉しかった」「アナウンサーになりたいという夢がより大きくなった」等の感想があり、貴重な経験となったことが伺えた。（各日午前・午後の計4回開催／参加者68人）

※子どもゆめ基金助成事業

■ラジオ・DJ体験教室

8月15日（木）、小学4～6年生を対象に、FMヨコハマのスタッフによる「ラジオ体験教室」を開催した。ラジオの歴史や番組作りに関わる人々についての話



の後は、『e-ne！（イーネ）』の番組内で、リポーターの穂積ユタカさんが放送ライブラリーから生中継する様子を見学した。また、小豆やうちわなどを使った効果音作りの体験や、ニュース・ラジオドラマ等からなるミニ番組作りを体験した。（参加者19人）

また中学生を対象に、『tre-sen+（トレセンプラス）』のDJ・光邦さんやスタッフと番組を作る「DJ体験教室」を開催した。3人ずつ6グループに分かれ、参加者が事前に用意した自己紹介や曲紹介の原稿を元に、番組を制作、発表した。番組内では、部活や趣味など今打ち込んでいるものについてのトークに加え、ポップスやクラシックなど多彩な曲が紹介された。優勝グループには、『tre-sen+』のスタジオ見学がプレゼントされた。（参加者17人）

※子どもゆめ基金助成事業

■BL・クリエイター支援サービス利用状況

昨年9月15日の運用開始から9月30日までの利用状況。

◇配信番組数：テレビ番組 2,746本、ラジオ番組 744本

◇利用登録者数 130社・441人

◇視聴実績 テレビ番組 669回、ラジオ番組 86回

今後も本サービスの充実を図り、放送局員への利用を促進していく。利用方法など本サービスについてのお問い合わせは、当センター業務課まで（TEL:045-222-2881）。